

第 9 章

1945年から1957年のドイツ福音主義教会救援事業

1

ドイツ崩壊前史 - 抵抗運動と救援事業

ハンス・シェーンフェルト - オイゲン・ゲルステンマイアー

第2次世界大戦中に関与した人も関与しなかった人たちもすべてが、ドイツは戦後どうなっていくのか心配していた。中部ヨーロッパで中立を保っている2つの国スイスとスウェーデンは、砕かれたドイツの更なる運命に対して共同責任を覚えた。中立的で人間的な救援が話題になった。2つの国で救援に備えていた人たちにとって、「戦争によって生まれた憎しみの心理的敷居」を克服することは容易ではなかった。このことは特にスイスで慎重に努力された。彼らは連合国の情報をよく知っていた。[1]

ジュネーブでも、世界教会運動のセンターの中に、プロテスタント教会によってドイツのためになされるボランティアの救援が考えられた。それはあらかじめ計画されていた。救援事業の開始について最初の計画が議論されるようになった時、私たちにはまったく安心できないことが分かった。だが、1931年以来、ジュネーブでも論評されるようになり、ジュネーブにある暫定的な世界教会協議会の研究分野の共同研究所長であったハンス・シェーンフェルト博士の名前が心に浮かんでくる。オイゲン・ゲルステンマイアーは次のように書いている。「ハンス・シェーンフェルトは、まだ戦争のただなかで、ベルリンの瓦礫がれきの原の間で攻撃されて犠牲になった者だけでなく、ドイツ人も同じように加えられるべきであるという、世界教会大規模救援事業計画の情報を、私に伝えた。これは、1944年6月20日より前であった」[2]

この世界教会センターでルター教会連盟に支持されたアメリカ合衆

国ルター教会は活発になった。彼らは多くの人的つながりを通して、ドイツのルター派の州教会とつながっていた。この古い関係はヒトラーによってでなく、戦争によってでもなく、予測された崩壊によってでもなく、破壊されえたことがはっきりした。[3]

ドイツにおいてもあらかじめ計画を立てるようになった。ここで教会外務省の幹部会は、シュヴァーベンの神学博士オイゲン・ゲルステンマイアーに注目した。彼は彼自身が消息通として望んでいた内国伝道中央委員会委員長をはっきり拒否された。この人たちはどこのテーマに関するどんな話題も大反逆として認めなかった。だが、それはドイツの敗戦で失われるものを内容とした。ゲルステンマイアーは、その当時、そのことについて話ができる指導的な人物が内国伝道にいないことも分かっていた。[4]

だがヴェルテンベルクの州監督D. ヴルムとベルリン・ブランデンブルクの次の州監督とD. Dr. オットー・ディベリウスとバイエルンの州監督D. マイセルは、一致してゲルステンマイアーが世界教会の中にいる兄弟たちと一緒に救援作業を準備してきたことを知っていた。

なお、ドイツは戦後なにを始めなければならないのかという問題と根本的に取り組んだ一つのグループがあった。それは抵抗運動に集まった人たちのグループであった。彼らは「2つの事柄を明らかにした。即ち、敗戦は、私たちの国民の中にすべての困窮を生み出し、どんなものとも比較出来ない、あるいはどんな標準も当てはめることが出来ないほどのものになっていること、また敗戦は、敗戦それ自身が問題なのではなく、不安をもたらす敗戦が私たちを完全に驚かせはしないこと、私たちが助けのない状態のままでないことは、明らかであった。同じ問題が政治においてもはっきり見られるようになった。それはモルトケ伯爵をとりまくクライスアウエル・クライス、ゲーデラーやハッセルという名前を、軍事的に駆り立てた抵抗運動勢力とならべて、思い出してもらいさえすればよい」[5]

オイゲン・ゲルステンマイアーはこの共謀者のグループに属していた。ヴルム、ディベリウスとマイアーは、彼を通して、ヒトラー暗殺計画を知った。ゲルステンマイアーは1944年7月20日から刑務所に

入っていた。そこで、彼らは友人の刑務所牧師ハラルド・ペルカウと計画を練った。戦争が終った時、彼はパイロイトの刑務所にいた。なお、州監督D. ヴルムも1944年7月20日以降シュトゥットガルトで何もしなかったのではなかった。救援事業計画は更に続けられた。記録は1945年2月のある日より「ドイツ福音主義教会の自助事業」に関するシェーンフェルト博士によっている。彼が自ら訴え、証言しているこの記録を、私たちは書かれたとおり、文章につけられている注をたどって読むことができる」[6] 崩壊後すべては、予想された以上に不意に急速に起こったが、それは没落してしまったというのでない。ゲルステンマイアーは刑務所の管理棟の前に、国際赤十字委員会の記章をつけたトラックが来ているのを見た。彼がチェコ人の守衛にトラックの持ち主が誰であるかを聞かないうちに、元気な男が彼に歩み寄ってきた。ゲルステンマイアーは「救援作業の構想の概略」を彼に示し、彼はトラックでジュネーブに運ばれた。赤十字の権威者たちはすべての国境の障害を取り除くことが出来た。[7]

ジュネーブの世界教会センターの中でヴィレム・A・ヴィザートフトとゲルステンマイアーの間に、初めは意思疎通の障害があった。カール・バルトもゲルステンマイアーについて初めは公然と批判した。その「まったく如才ない人物」は最初、それほどよくはなかった。だが、こうしたことは長くは続かなかった。[8]

彼は、ベルンにあるアメリカ大使館に大使の肩書きをもつアメリカ秘密情報機関の長アレン・デュレスを訪問することに成功した。それは7月20日にゲルステンマイアーがなし、非常に多くの扉が外国で開かれ、その何百倍ものことがヨーロッパ、アメリカにおいて明らかになった。教会のとりなし、慈善事業といわれたものは、このようなことを何もなしえていない！[9]

「アレン・デュレスは、彼の兄弟ジョン・フォスターをアメリカの最高政府顧問 ジョン・J・マクロイと混同するようなことをせず、もう一度ドイツにチャンスを与えようとした」[10] アレン・デュレスはゲルステンマイアーに最初に出会った時から、このことについて再三「ひかえめに」、必要な場合に援助するようになった。「敗戦のドイツに

において、全ての交通の便がほぼ完全に崩壊した時、連合軍の助けを借りて、人間も現物支給物資も同じように、交通輸送に必要な通行許可証を得なければならないことは明白であった。」「[11]

ゲルステンマイアーはアレン・デュレスの仲介によって、数週間ドイツに帰ったあと、運転手付の「コマンドカー」、燃料、行軍用の糧食、また物資輸送の通行許可証を得たが、それにアメリカ人随行士官、通訳が出来るルター派信者を自由に使えるように付けてくれた。

その後、彼らが救援物資のために必要とされた時、イギリスと同じようにアメリカの軍機関は救援物資のために必要であれば、連合国の軍需備蓄品の輸送手段を増強した。アメリカの軍隊は牽引トラックでヴァチカンの最初の寄付を、アルプスを越えてドイツに運んだ。アメリカ政府は海外からの大掛かりな荷物を運ぶのに、すべての船倉と必要な運送料をドル建てで行えるようにした。それだけでなく、アメリカからの大きな寄付をブレーメンから、とりわけ生活に困窮しているベルリンに、必要なものを軍が提供する輸送によっておこなった。このことは同じようにハンプルクとリュベックからのイギリスの輸送車両でもおこなわれ、略奪から守るため英国軍警察を派遣した。[12]

「アメリカ合衆国政府は、海外からの大掛かりな荷物を運ぶのに、船倉全体と必要な運送料をドル建てでおこなおうと考えていた」。アメリカは「強制移住外国人」のもとで国外へ移住する人たちの主な引越荷物を、移住しない人たちの世話をすると同じように運んだ。アメリカ人納税者は、ゲルステンマイアーにはっきりと言ったように、その負担を引き受けたのである！

自然発生的なすばらしい救援が、本当に不足したことは一度もなかった。アメリカの救世軍の車両は、例えば1945年7月1日にチェコスロバキアの国境からニュルンベルクに向かう何千人もの難民を助けていた。恐ろしい戦争は、すでに1月に、彼らをシュレージエンやほかの故郷から追放していた。最後に敵国を通る長い退路で、彼らは財産の最後の残りを失った。すなわち馬と車、衣服と外套、預金通帳と貴重品、讚美歌集、成長期の息子や娘も奪い去られてしまった。彼らは、極貧で手になにももたない。しかし生への強い意志をもち、心か

ら神を信じて、チェコの刑務所、強制収容所、強制労働を出て、異国の道をニュルンベルクへと向かった。彼ら - 多くの婦人、非常に多くの老人、もっと多くの子どもたち - は町の公園で横になった。市当局は、この1万3千人の追放された人たちを大規模宿泊所に収容した。福音主義看護奉仕は農村の諸教会に大規模な食料援助受付を組織した。飢え、弱った1万3千人が助けられた。収容所共同体が生んだ7千人の福音主義のメンバーは冬になるまで、野外で礼拝を守らなければならなかった。人は「日々のパンの奇跡」を生きた。人はアメリカ人に感謝した。[13]

2

「ドイツ福音主義教会救援事業」の創設 - 最初の協力者
男性社会 - 組織再建 - 「ヴィヘルン2世」 - 西と東

ゲルステンマイヤーが一番望んでいた巨大な2つの教会が共同で救援事業を行なうことは、果たせなかった。彼がしようとした事業は失敗に終わったと言ってよい。その時はまだ熟しておらず、両派の関係は、まだほぐれてはいなかった。カトリックの救援組織はヴァチカンの指導のもとですでに動きはじめていた。ドイツでは、そのために定着した組織が「ドイツ・カリタス会」の中で自由に働いた。[14]

1945年8月1日に、州監督、D. ヴルムはいわゆる「キリストの愛のシュトットガルト告白」の中で初めてドイツ福音主義教会全体の救援組織を創設し、乏しい1年のあと、これに福音主義自由教会の全部が加わった。[15]

1945年8月27日から31日まで、開催された福音主義のトライザ教会会議で「ドイツ福音主義教会」が設立され、ジュネーブからカール・バルト等、世界教会協議会の正式の代表も出席した。シェーンフェルト博士は計画された救援事業について報告した。そして互いに激しくぶつかった多くの人たちが袂を分ったかのように見える「ドイツ福音主義教会救援事業」が設立された。救援事業の長に新しい市議会議長、

州監督、ヴルムが、指導者にゲルステンマイアーが全会一致で選出された。[16] 再建委員会はヴルムを先頭に立て、立法権をもつ指導組織が編成された。

1945年10月18,19日、激しい議論がなされ、それはまとまらないように思われた。「シュトットガルト罪責告白」はその時出席していた世界教会協議会の公式代表に門を広く開いた。それは彼らすべてを自由にし、親しく贈られた感傷的でない友愛を結んだ。[17] その直後、世界教会の視察者のグループが苦境の情報を得るために南ドイツを旅した。[18] この最初の訪問があり、翌年は数え切れないほど寄付する教会代表が後に続いた。

ゲルステンマイアーはダイナミックで独創性に富んだ人物として頭角をあらわすようになった。彼は、1944年7月20日からのドイツの抵抗の遺志を、深い屈辱の中にいる全ドイツ国民に果たすために召されていると思った。「彼は驚くべきエネルギーと力にあふれた体力をもって成果をあげた。ドイツの100万人が彼のおかげで、失意と無気力状態から立ち直った。連邦政府になる4年前、ゲルステンマイアーはアメリカ合衆国大統領トルーマンに受け入れられ、ドイツの代弁者になった。」[19]

ゲルステンマイアーは、救援事業に彼自身の重大な影響を与えた。だが、基本的にはディアコニーの歴史の中で最後に突破すべきことだけを彼は実行した。確かに人は戦後の初めに起こった状況を予測することは出来なかった。

救援事業の再建はすばらしい発展の中でおこなわれた。1945年10月1日の救援事業の公的な開始の後、最悪だった冬を克服するや否や、ゲルステンマイアーは、国外にいたが決して亡命者になったのではない世界市民で愛国者のクラウス・メーネルトに協力を呼びかけた。彼はほとんど歓声にちかい声をあげて、メーネルトを迎え、次のように言った。「この救援事業はこれまでなされてきたもので、それはドイツ全体が外国との、とりわけアメリカへの親密な関係をもっている巨大な国際救援組織である。」[20]

ゲルステンマイアーは職員たちをよく激励した。「私がすぐに気づい

たように、彼らはあらゆるところからこちらに向かってきた。捕虜から解放された軍隊の将校、ドイツの強制収容所に収容されていた者、牧師、商人、外交官など『混成の中隊』とゲルステンマイアーが言ったように『男の戦闘的な兄弟の連帯』があった。パウル・コルマーを得たことも「幸運な偶然」であった。だが救援組織の純粋な男性社会は、80%が女性である内国伝道中央委員会とは異なっていた。[21]

ゲルステンマイアーが最初のチームに呼び集めた仲間たちの多くはドイツを超えた世界を考えていて、世間のことによく長けていた。けれども、それは彼らの祖国のことであつたし、彼らの祖国にとどまっていた。また彼らがにごった流れの中にあるドイツの困窮をせき止めるダムを築こうとするのであれば、いつでも外国に降伏し諸民族の共同体の中に自分の国を加えてもらえるように準備していた。

救援事業の青年たちは、トライザで好戦的に登場したように、初めから、告白教会と意見が一致した、とりわけ教会は根本的に、共同体の基礎から新しくされなければならないという新しい教会外務省の指導者ニーマラーと同じ意見であった。[22]

「先頃の明あるベルリンの監督オットー・ディベリウスはトライザで、事業から何かが生まれることはないと思った。だが困難は多くあり、私は結局、伝統的なドイツの教会世界に過度の期待をした。そうしている間に、私たちは事実あらゆる種類の大きな困難に立ち向かい、ほぼ6ヶ月後、3千万のライヒスマルクを集め、1,600トンの衣類と、2万トンの食糧をかき集めた。その3分の2が東地区に運ばれた。なにが起こったかと言えば、そこであふれる引揚者の流れが渋滞し、またそこを占領軍が行進した。その年の間に、この数は更に上まわるようになった。ベルリンの監督の疑念は、初めは励ましであったが、論破された。」[23]

トライザで決議されたことは実際に実行されるようになった。最初に救援組織の整備がなされた。すべての州教会に救援組織の中央事務所にあたるものがつくられた。シュトゥットガルトの中央事務所に、あとで救援委員会と改名した再建委員会が招集された。救援委員会は、東地区から追放された人たちのために引揚者教会を建て、またすべて

の連合禁止の廃止後、新しく連盟をつくることを望む人たちのために救援事業を合併するようになった。[24] ゲルステンマイアーは彼の友人たちと研究グループの教育をはじめ、とにかく「救援活動の基礎とドイツの状況について活動報告をアメリカの援助教会のために、社会的、世界教会学的、政治的研究を進めた。それから1948年5月中旬シュトゥットガルトで救援組織の事務局長会議で決められた社会学者、政治家、またジャーナリストの会議で、緊急の日常の問題を共通のサークルの中で論議した。1948年、ドイツの西地区では、会議のこの1年、会議のメンバーは全体的に感情の高まりがなく、なお重苦しい非常事態のもとにあるように見えた。ゲルステンマイアーの親しい協力者の多くは、その時つくられた連邦共和国の中に、国の指導的な役割に、外交官に経済省に、連邦国防軍にも、戻ってきた。[25]

この関連の中で、もう一つの決定がなされた。それは慈善を行っている救援事業の主な活動領域の中でなく、国民自身が将来を決めるという決定がなされた。また「政治の周辺で」ゲルステンマイアーと彼の友人によって、パウル・コルマーが先頭に立ち、定期刊行物『キリストと世界』の創刊が決められた。アメリカ軍政府と一緒にしようとする困難があったが、この新しい雑誌はドイツの状況を伝える新しいタイプで、発行部数が多い週刊誌の中で第2位となった。[26]

ゲルステンマイアーが進んで教会を助けようとしたすべての努力は、大きな歴史的関連の中に見なければならない。彼は「ヴィヘルン2世」について、彼の協力者たちと話した。中央委員会の創立年1849年から、この研究チームは「新しい社会福祉政策上の進撃」にとりかかった。結果は間違っただけではなかった。その多くは古い帝国あるいはワイマール共和国の社会福祉関係立法の全体または一部分を持ち込んだものであった。また同じように、1945年来、内国伝道中央委員会はこの課題に誠実にとどまった。彼はここで評価できないほど貴重なことを提案し、また必要な異議申し立てを行った。救援事業も同じようにこの線にとどまった。教会だけがとにかく、この社会福祉政策の課題を自己責任として行うように、繰り返しせまった。1939年と1945年の間の教会闘争における経験は悪魔的な力を、なお、あれこれと思ひ浮かばせ

るのであった。[27]

ゲルステンマイヤーは『政治的情熱をもつ神学』の中でクラウス・メーネルトが言っているように、東ドイツと西ドイツが互いに離れて成長することを認めようとしなかった。4つの地区に分裂して永続することは許されてはならなかった。とりわけ、彼は東地区とつながっていると感じていた。そこにルターの改革の歴史的な思想の場があるというだけではない。同時に、そこで生活している少数の人たちを無視する福音主義の^{かすがい}人たちがいた。救援事業は次の年も、共に、互いのために、最も貴重な^{かすがい}礎であったし、あり続けた。平均すると1957年まで、集められた東地区のすべての救援物資のおよそ40%が供給されるようになった。ロシア人が占領している地域での救援組織にとって活動は困難であったが、不可能ではなかった。終戦の月に赤軍が凱行進をした際に行なった残虐行為の最初の報告が、ベルリンの救援組織の全権を委任されたハインリッヒ・グリューバーによって届けられた時、シュトゥットガルト中央事務所の中に最も衝動的な時がきた。また、東のオーデル・ナイセにドイツ人が追放された時の状況を伝えるニュースは、その時発信されなかった。これらすべては非常に戦慄すべきことであった。2～3のことが救援事業を伝える報告誌に載るようになった。「例えば、農民たちはみじめな帰還をした村で、私たちがベルリンに送ったじゃがいも列車のすべてにあっという間にかき集めた、というように、非常に衝撃的で露骨で悲惨なことが、飾らないありのままのことであった。」[28]

ここで救援事業の12年の歴史全体が実践したこと、また今日に至るまでドイツ連邦共和国におけるドイツ福音主義教会のディアコニー事業団が2つの名前を今日まで持ちつづけてきたことは、全く偶然の出来事ではなかったことを想起させる。それはすべての世界教会協議会の奉仕の性格を言葉で表現して「内国伝道と救援事業」と呼んでいる。[29]

30ヶ国からの世界教会救援 - 世界教会協議会
教会再建 - 多くの救援成果

1945年の夏にはすでに世界教会救援の最初の2万ドルが、ジュネーブで行われた世界教会会議でアメリカのルター教会の常任代表、救援事業の指導者シルヴェスター・C・ミヒェルフェルダー博士によって、自由に使えるように準備された。[30] なお、戦勝国諸政府の厳格な禁令はドイツへの慈善の援助を妨げるものであった。[31] だが援助を行うことによって占領国を支持する多くの人たちが暗黙のうちにでてきた。敏速な救援が、1945年夏に、スイスとスウェーデン、およびノルウェーを通して救援事業に割り当てられるようになった。1946年夏から大規模な救援が、最初の場所に移動したアメリカから始まった。

こんなに速く来ようとは！責任者たちは、目の前で絶え間なく起こる奇跡を心にとめた。配布できた救援物資の80%は、スイス、スウェーデン、ノルウェー、およびデンマークの教会から送られた。自分自身が戦争中ドイツ当局によって大変苦しめられたオランダが救援物資を寄付した。イギリスも負けてはいなかった。アメリカで、とりわけ先んじて物資を集めたのはルター教会であった。同様にアイルランド共和国も寄付をした。そしてブラジル、南アフリカ、オーストラリアにいるルター教会のドイツ系の人たちが続いた。彼らはこの年月を通して救援事業が求めた援助を、絶えることなく行なった。食料品、衣類、そして靴、ドイツの工場での加工原料を提供し、仕事をつくりだし、10の分野で価値あるものをつくり、財源もマーシャルプランにあるように、教会の再建のための貸付資金を貸し出し、後では返済しなくてよいようにした。救援事業はすべて公表され、そのすべては長いリストに分類され、入念に保存されるようになり、そこで細部にいたるまで読み直して調べることができるようになった。[32]

どこに行けば援助を受けることができるのか、また何が特に差し迫って望まれているのかというという問い合わせは、いつも明確にされるようになった。人は受取人に問い合わせ、送り主との直接の関係をもっと増やすように努めた。しばしば寄付された衣類の中に、困窮

者との親しい連帯を示す暖かい挨拶の小さい書きつけがあった。援助する国々の中でもっとも偉大な献げものは、例外なく裕福な人達からのものではなかった。

外国の援助者たちは、しばしば援助を受ける一人ひとりと知り合いになりたいと思った。救援事業の中央事務所は数え切れないほどの人を仲介することができた。外国での報道は、範囲をいっそう広げていった。ことばと画像の報道、映像が年毎に、英語とドイツ語に書かれてシュトゥットガルトから外国に送られた。前の敵国に招待されたのはゲルステンマイアーだけではなかった。アメリカで、ゲルステンマイアーはラジオで数千人の人々に話しかけた。この話はラジオ放送を聴いていた多くの人たちに受け入れられた。ニーメラーもアメリカで直接数百万人に話した。[33]

1945年11月に初めてドイツ人参加者は同じ権利を持ったパートナーとして世界教会協議会の実行委員会の第1回会議に、また引き続いて行われたジュネーブの世界教会協議会再建委員会の第1回会議に出席を認められるようになった。その時1948年8月、アムステルダムで世界教会協議会の第1回大会が行われた。ここで「諸教会間の救援と難民援助業務を区分」するための「再建・区分」が拡大された。

アムステルダムで組織された「世界教会協議会」はついに、ドイツを担当する救援組織の国際支部としてドイツ福音主義教会の救援事業を認証した。ドイツ福音主義教会の救援事業は、これからはドイツで安定した寄付金の交付を保証しなければならなかった。このことは、ジュネーブで救援の申し出がなされた際に、シュトゥットガルト中央事務所の正式の同意を前提とした。すでに1947年に、ルンドにおけるルター教会世界連盟の大会が行われていた。この世界会議はゲルステンマイアーが提案した議案を全会一致で決議した。ルター教会の指導を政府に強く勧めるべきであり、「遅れのないふさわしい対策にとりかかること、故郷を追われた人たちを、その生まれや言葉、国籍や地位、また国の有効な援助を受けているかどうかを問わないで認める」という決議文が全員一致で決定された。

真の転換は、1949年2月に行われた世界教会会議のハンブルク第1

回世界国際難民会議で、内外の国の71人の代表と49人の代表者が参加した全世界の救援組織で起こった。彼らは世界のキリスト教だけでなく、ヨーロッパの運命に関心をもつすべての国々が数百万人のドイツ難民に実際の救援対策に速やかに着手するように懸命に訴えた。

主なテーマは全難民を対象とする世界規模の教会の責任と認識された。それと共に、追放されたドイツ人と拉致された外国人は、平等に扱われた。だが難民問題はドイツの教会によってではなく、世界の教会の援助によって解決されるべきではないのか！ということが明らかになった。根本的な救援は政治権力の出動によってのみ可能なのであり、沈滞している世界経済の回復が待たれた。これはドイツ人難民救援にとって全面的な進歩であった。

協力は非常に緊密になり、「世界教会協議会のメンバーは私たちのところで自分の家にいるようであり、全世界からきた教会人たちは私たちのところに来ている(即ちシュトゥットガルトに)」ことを感謝した。

「ドイツのキリスト教界は1945年以降、多様かつ急速に、世界教会協議会の中に再度受け入れられるようになったと、世界教会との関連で言われるようになった。それは誰かある人が、この事実を細部にわたって包括的に評価する状況にいるということではないであろう」。

同じ時に、ドイツ教会の歴史の中に、新しいことが準備され、それぞれが出来ることを申し出て、大規模な世界教会の救援準備を手伝いたいという人が受け入れられ、1951年に始められるようになった。^[34]

第3帝国で数10万人が教会を離脱し、また青年が反教会、反キリスト教の影響をうけるようになったことを詳しく知った外国の援助教会は、多くの教会、牧師館また教会所在地が瓦礫と灰のなかに崩れていることを思い、彼らがなそうとしている先頭にドイツの教会再建をおいた。なにしろ聖書、讚美歌、信仰書、キリスト教文学、そして必要とするすべてが無かった。軍政府はドイツ国民を教育で変えるプログラムを定めた。援助教会にとって、信仰生活において深く動揺し混乱している国民のキリスト教の新しい規定が問題であった。

ここで、援助教会と最初に呼ばれたと心得て全ての現世的困窮に抗して立ちあがった救援事業の双方の理解に限界があった。大規模収容

所の中に、空になった兵舎の中に、バラックの家の中に、全財産を失った難民がいた。傷痕軍人と帰還民、戦争捕虜と抑留された人の福祉において、東ドイツに拉致された10万人と言われる婦人と女子を救援する特別業務が始まった。国の救援は困難となり、そのすべてが廃止されたので、緊急の窮状が生じた。「そこで最初の帰還者たちが東から悲惨な状態で到着した時、大規模な活動をする救援組織がフランクフルト・アン・デア・オーデルに設置された。長い間耐えてきた人たちが、やっとドイツの地に到着した時、最悪の状態の中で大量に死んでいった。救援組織は大ザクセンに、釈放された帰還者のために医者の手当てを受け、職業相談を受ける一時収容所を開設した。収容されたすべての人は、故郷を失い、身寄りがない運命を知った。その時帰還者救援は地方の救援組織の中で継続された。

また、1939年11月4日に、D.Dr. ヘッケル監督によってベルリンの教会外務省の中に設立された抑留者と戦争捕虜のための福音主義救援事業にも、新しい活動が割り当てられた。それは、組織的に独立し、またドイツ福音主義教会協議会の指示により、エアランゲンでは1945年4月中旬より、ミュンヘンでは1951年から活動したようにドイツ復員主義教会の救援組織と協力した。

これらの奉仕は第2次世界大戦から何千というものが忘れがたく残っている。最初に約5万3千人の外国にいるドイツ人抑留者の世話がなされた。その時、あちらではドイツ人兵士の戦争捕虜、そしてこちらの国内ではアメリカとイギリスの戦争捕虜の世話がなされた。あらゆるところで、キリスト教の文書だけでなく、多くのものを与えて、民間の収容所の人々に宣教的な教育を行うようになるまで休みはなかった。

そこで、毎年100万人をくだらない国内にいる家族との手紙のやりとりを助けるこの事業は、ヘッケル監督の助言によるもので、数え切れないほどの人たちに信頼された。捕虜と帰還者たちはヘッケルを戦争捕虜の父と呼んだ。私たちは1953年からのドイツ福音主義教会の救援事業年報の中に、帰還者収容所で彼らのただ中にいるヘッケル監督の姿を見出す。そのように2つの救援事業は献身的奉仕をなしたので

あり、また同じようにジュネーブの世界教会会議から種々の方法で援助がなされた。[35]

1947年から1956年までの年報は、ドイツの大窮乏の年に、考えられないほど多くの人たちが給付と援助に夢中になった、その時に手にした明快で広範な認識を示している。

東と西で1対10の通貨切り替えが行われた1948年という年は確かに転機を意味した。その間にさらに50万トンを超える栄養価の高い食料品が届けられた。援助物資は配布され、1億8千ライヒスマルクが国内で集められた。当時キロで計算されるようになったのだが、数百キロの外国からの原料をドイツで完成品にし、付加価値をつけることができるようになった。世界で200万ドルと150万を超えるスイスフランの特別計画が実施された。

救援事業によって、よく練られた特別な交通網の成果は驚くべきものであった。150万人の慈善の荷物が、ブレーメン港に平均して36日の所要時間で、外国から運び込まれ、全域で確実に受け取られるようになった。[36]

1948年以前のこれらの年を回想すると、ほかに見る記述はない。だがその背後でなされた出勤と愛があった。ありのままの数で言えば、300万人の子どもたちに数週間にわたって食べさせ、延べ50万人が参加した1万人の青年キャンプは追加の食料を提供し、1万4千人の学生達が食べさせ、1,500人の専従の援助者と共に難民救済を行うようになり、2千の家族を定住させ、2万人の故郷を失った戦争犠牲者が年間の再教育を受けて雇用されるようになった。内国伝道のホームと施設のほとんどは支援されるようになった。公衆衛生業務は救援事業の特別業務の中に属した。「実際に、病院のインシュリンの蓄えがなくなり、数千人の糖尿病患者がたちまち死に直面した時、救援組織の切実な訴えにより、すぐにルター教会世界協議会の寄贈により大量のインシュリンが届けられた。教会と教会連盟は、ドイツで手に入らない薬を、たとえば十分なペニシリンを、ある時は7,050をひとつのまとまりとして送ったように、休みなく送り続けた。アメリカの軍当局は役に立つ薬の提供をおこなったのである」[37]

個人牧会は、およそ1千万の子どもたちに何らかの援助をし、また希望をもたせる教会再建の一つとみなされた。教会共同体における子ども給食、集会場所の建築があげられる。外国は38のバラックの教会を贈った。47の「バルトニング - 困窮教会」はあの初期の救援事業計画で、シュトラールストからシュトットガルトまで爆弾で破壊された町の中に建てられた。100万以上の聖書と新約聖書が、キリスト教文書、250万冊のヘルンフートの「日々の聖句」も同様に外国からの援助として配布された。外国の紙の寄贈と原料の寄贈によって、さらに100万冊以上の追加の聖書をドイツでつくることができた。1950年、なお300万冊の聖書と新約聖書が、とりわけ引揚者のために待ち望まれた。135万冊の宗教の教科書がとりわけ東地区のために追加して要請された。

そこで、実用的なすべてが足りなかった。自転車、チェーン、チューブまたタイヤの外被が、祭壇のローソクが足りなかった。それらはずっと足りなかった。牧師と共同体シュヴェスターは制服を受け取った。1,500の職服、500のスイスの背広もめんが引揚者牧師達のために、現物支給された。スイスのディアコニッセの家の木綿の寄贈から6,400人のディアコニッセたちの服を作ることが出来た。2万の自転車のデッキとタイヤのチューブが配られた。

これらのすべての活動は、シュトットガルトで100人の専従のスタッフとおよそ9万人の男女のボランティアによってなされた。[38]

4

経済の奇跡とディアコニー - エスペルカンフ - ゲルステンマイアーの救援事業からの離脱 - ドイツの教会による最初の世界教会援助 - 東ドイツにおける内国伝道を評価する - 社会の変化

1948年の通貨改革後、再び経済的基盤は確固たるものとなったが、人は極貧になった。再び救援事業が援助し、家庭での募金が続けられ献金週間が組織された。教会からの援助の流れがゆるむことはなかつ

た。心配はほかにも多くあった。急速に経済発展する「ドイツの奇跡」、これまで知られていなかった商品を、連邦共和国にあふれさせたマーシャルプランは、外国の援助教会をいらだたせた。ここですべては間違ったイメージを持たせないように結集された。救援事業は、報道部局を持つよく出来た機関であった。

経済が奇跡的に復興する輝かしい外見の影で、相変わらず大量の引揚者があり困難で大変骨の折れる日々を送っていることが、外国の同胞教会にたちまち知られるところとなった。600万戸以上の住宅が足りなかった！1948年外国への逃避が始まった。次の3年のうちに300万以上のドイツ人が故郷を離れた。内国伝道移民事務所が港町で、相談業務で超満員の人たちを支援しなければならなかった。船員伝道は緊急なものとなった。[39]

以前のデモは殆ど排除されず、東地区を離れた人たちによってたちまちいっぱいになった。それは次第に数百万人になった。このすべては、いつも数値で示した資料によってはっきり示されねばならなかった。1950年の通貨改革後の2年間、連邦共和国の失業者は200万人たらずが数えられた。ハンブルク - ベルゲドルフの失業者救済事業は、身分証明書を見せた人に対してパンとマーガリンを安価で分配した。1951年にはなお35万人をこえる故郷を追われた人が1945年と1946年以来、大収容所にいた。[40] 1953年の春に、シュレスヴィヒホルシュタインには、なお9万6千人が収容所において失業していた！3万人が仮の宿泊所で細々と暮らしていた。その中に2万5千人の故郷を失った農場主が数えられた。5人あたり10平方メートルの住宅であった。バイエルンの森で工業殖民が足りなかったところと住宅難民との関係はよいものとはいえなかった。[41]

経済復興の奇跡は多くのことを無視しているように思われた。1945年以来、引揚者の農民グループの絶望は「移民運動」に結びつけられた。国が計画した移民政策は、移民する可能性のある人を探して大収容所を離れるように指導し、そこに連れていった。救援事業は国と移民団体との間の誠実な仲介者としてかかわった。いまや多くのことが進み出した。負担調整法[戦災を受けた者の補償をする旧西ドイツの制

度]はついに実現し、救援事業については何度も前向きに努力し、前もってよく考え、なされるようになった。

非常に絶望的に見えるこの状況の中で、救済事業の住宅業務が始まった。エスペルキャンプ大計画の開始は、シグナルの働き、希望のしるしとなった。1949年以來、ここ新しい町に1万人の入植の準備がなされてきた。その経過の中でイギリス人将校が軍当局を動かして、はじめのきっかけとサポートが始まったことを忘れてはならない。元の弾薬庫用地は、実際に近代的産業地区大住宅となり、社会福祉施設の成果をあげた。1千人の難民の家族が大収容所からここに引っ越すことができた。似たことがほかにも軍政府支配下の収容所を爆破する予定であった時に見られた。工業化は仕事を見つけてきた難民を取り込んで定着するようになった。初めて数千人に希望の光が輝いた。[42]

救援事業が先行して急速に広まった住宅業務は、教会の貸付金をもっているそれぞれの州教会の中で教会住宅共同組合も運営した。

多くの引揚者難民のためには、1951年最後に成功した移民は「追放された人、排除された人たちの洞察と行動力によって、くつろげるベッドが準備されるまで、最初から国に期待せず、断念と無関心を振りほどいて進められた。彼らはいつも即興で、どうにか粘り強く困難を乗り越えた。私たちは彼らに多くを与えることは出来なかったが、彼らに提供を約束し次第に姿をあらわしてくるものは、大変重要なものであった・・・。

負担調整は、『最初から』私たちが言ったように、例えば、住宅建築とルートヴィヒ・エアハルトの成功した通貨改革と経済改革のように、ドイツの廃墟となった地域から成功する道の基礎となった社会福祉法と結びついた」[43]

もちろん外的な成功だけではない、そうではなく内的な困難もあった。1945年8月、トライザで救援事業が始まった時、多くのことがうまくいっていたわけではない。ゲルステンマイヤーは国内と国外の救援事業の指導と代理を委任されるようになった。すこし前、ベーテルに集まった内国伝道中央委員会を代表するフリッツ・フォン・ボーデルシュヴィンクがいた。内国伝道中央委員会はドイツ福音主義教会の

ディアコニー職という形の中で、また、教会事務所や教会外務省がするような状態で救援事業が承認されることに満足できなかった。中央委員会は初めの根本的な動機から、体制教会の憲法に基づいたディアコニーを組み込もうという提案に反対した。

あとで、オットー・オール博士、ラインラントの長、内国伝道最大の州連盟の長は、ドイツ福音主義教会の教会会議で中央委員会の名において同じ見解を代表した。教会会議のほかの決議は、内国伝道の拒否権を記入した。

そこで、ドイツ福音主義教会の枠の中でなされる救援事業の最終的な組み込みは、ドイツ福音主義教会のように協議をしたあとに続く、すべての大会に回避され、そしてすべては、1951年ハンブルクで予定されていた教会会議に最終的に転嫁された。[44] ただ、その中で救援事業は戦後に限って、時間的限定がついた課題であると認めることで一致をみただけであった。

ゲルステンマイアーは、このことに対して文書でドイツ福音主義教会の議会の議長、監督、ディベリウス博士に、1956年12月4日、反論をした。ディベリウスからの返答は私たちのところに来ていない。ゲルステンマイアーは、とりわけ教会の機関の救援事業が内国伝道の拒否権に任されるようになることについて訴えた。彼は決して合併に抵抗しなかった。それでも、このことは、非常に多くの未解決の悲嘆に苦しんでいる戦後のきびしい困窮という一時代のなかでの3流の問題にとどまっていた。救援事業は急を要する、そのすべての行動を必要とし、そして世界の同胞教会によって納得できないと思われること、「衰弱して不名誉にも死んでいく」人を、援助するようになった。人はなぜ、いつも「救援事業の指導を難しくする」のだろうか？[45]

他のなにかが関係していた。ストラスプールのヨーロッパ議員の会議で、ゲルステンマイアーは、ヨーロッパの陸軍に関するチャーチルの演説に関連して、ドイツの参加について語った。1950年にエッセンで開催された第1回ドイツ教会大会で、この見解を恐れずに代弁した。[46] そこで彼は聴いて意外な感じを受けた人たちの前で、賛意をあらわした。しかし、ある程度の軍備拡張に固執した会議は動かなかった。

教会大衆が朝鮮戦争勃発後の再武装問題ほど強く興奮したことはなかった。ハンブルクでのドイツ福音主義教会会議は1951年につづく年に、同じテーマに取り組んだ。[47]

ゲルステンマイアーが激しい批判に身をさらし、政治的に神学的に異端者であるとの烙印を押されたことは否定できない。救援事業の内部でゲルステンマイアーの責任をシュトットガルトの中央事務局の指導下に限定したことは、ハンブルクの人たちに衝撃を与えた。彼はもはや「救援事業の指導者」として公文書に署名することができなくなった。また同じように、救援事業が割り当てるすべての営利事業を彼から排除した。それに対して、救援事業の連合的性格が強調され、ディアコニー委員会の組織編成が指示されるようになった。その主たる課題は内国伝道中央委員会と救援事業委員会のトップの委員会を結合することであった。まず骨の折れる6年の後、目標を達成できるとは当時は予測されていなかった。

これはゲルステンマイアーにとって、救援業務から引退するきっかけとなった。最初の10年の後、ドイツ福音主義教会のディアコニー事業が、登録団体として、また小さなほかの方式で、その激しい試練に印象深く説得力をもって耐えてきた時、ゲルステンマイアーはすべてを宥和的な光の中で見、次のように書いた。

「新しい教会法の規則また救援事業の保全は、私たちが得ようとしている福音主義教会のディアココニー職を身につけさせ、私にチャンスを与え、また仕事をやめさせた、私はそのことを何年も気にしてきた。私がうけた政治的委託は1949年に予想した以上に多くの時間を奪った。それが救援事業にとってよくなかった。私は救援事業にとってよくない国内政治にも外交政策の闘いにも巻き込まれていった。ディベリウス監督が、カールスホルストにいるロシア人から再武装に関する私のストラスブルでの演説を知らされた直後から、私は彼らにとって耐えがたい者となった」。ついにロシア人は東地区で救援事業を禁じて脅かした！「ディベリウスはそこに行ってもよいように準備していた。しかし、私は救援事業法が議決されたあと、いずれにしても辞退しようと思っていると、彼に言った。救援事業の指導と政治的委任は

私には耐えられないだけでなく、私の協力者も私同様に重荷に耐え得なかった。」[48]

かつて、内国伝道は一つの事業に提携する方向で近道を選んだこともあった。そのためにゲルステンマイアーの後継者選びが心配された。

彼らは、最初の時からの仲間であって後に「ハイデルベルク大学のディアコニー学研究所」教授を引き受けた神学者、教授資格者ヘルベルト・クリムを選んだ1956年、教会会議の後の臨時責任者として、初めの年から闘士でもあったD. クリスティアンベルクが彼の後を継いだ。[49]

1951年からは、なお10万人のとりわけ子沢山の家族と孤老がいた。彼らはみな困窮に悩んでいた。人はまさに控えめであり贅沢を言わないで暮らしていた。1955年に、2つの古い鍋が新しいものに変えられた。十分に場所が確保された内国伝道の施設において、特に栄養価の高い食料品、シーツとカバー、また多くのほかのものが同様に不足していた。通貨切替えの時のどん底を経て、なおゲルステンマイアーのもとでなされる外国からの慈善の贈りものが増加し、救援事業のうむことなき願いと活発な苦情申立ては成功した。1952年から追加して増加したアメリカからの余剰食糧品の割当は、それが特に助けになることが寄贈者連盟によって明らかになった。援助の全体は1948年、49年以前にドイツに贈られたものの4倍という予期しない高さに増大した。[50]

1952年ハノーバーでルター教会世界連盟総会が開催された。この町はまだ再建されず、多くの人々が廃墟の中にいた。その廃墟となった教会の中で開会礼拝が催された。「ルター教会世界連盟ドイツ指導者委員会」が作られ、その中央事務所がシュトゥットガルトの救援事業の建物の中に開設された。人はみな力をあわせて働いた。ルター教会世界奉仕団がとりわけ教会再建に集中したことは見逃されてはならない。[51]

連邦共和国の歩みはすべて経済的に急速に前進しているように思われた。人は大都市の商店街で輝くショーウィンドウに目をくらませてはならず、その裏にある貧しい路地が重要であった。未解決の問題のすべてについては自分の教会共同体の外部にある困窮についても、同じように意識が高まりつつあった。そこでまったくわずかであっても、

ドイツ州教会の会員からの援助金は救援事業をこえて送られてきた世界教会の難民救援に行った。それは『世界の人たちにパンを』行動に表した初めてのドイツ人の感謝に違いなかった。[52]

1953年の初頭、高潮によってオランダ、ベルギー、イギリスの1万人の人たちが苦境に陥った時、何千人も死に瀕し、家族を失った人たちが40万人と数えられ、ドイツ福音主義教会の中でボランティアの援助がはじまった。物資と資金の援助、緊急住宅と家具等々がオランダにいる被害者のために集められるようになった。1956年に、ドイツ福音主義教会の世界教会からの寄贈は救援事業をこえて、朝鮮戦争の犠牲者、ギリシアの地震、トルコで、シリア、パキスタンの地震、香港、ヨルダン、エジプトにおける難民、とりわけハンガリーの難民に役立てられた。ハンガリー救援だけで(当時の購買力で!)530万ドイツマルクを超える資金と物資が調達された。[53]

東ドイツのために、ルター教会世界奉仕団の側から広範囲にわたる救援対策が、定評のある救援事業中央事務所のベルリンの部署をこえてなされた。ところが突然1950年に、東ドイツでは世界からの慈善の贈りものの輸入と、地域社会の困窮者たち、とりわけ子どもの給食と規則的分配を政府はやめた。マグデブルクにあった中央分配倉庫の大規模な在庫は押収された。しかし、骨の折れる交渉の後、一定の条件のもとで解除された。東ドイツは住民たちが生活水準に達するように住宅を管理できるという。だが西と東にある共同体の間の社会主義的協力関係は、福音主義牧師の同胞救援と同じように東ドイツ当局には邪魔されなかった。知的な愛と双方の願いを具体的にしている適切な折衝手腕は、いつも可能であり救援給付にいたる特別な方法とみなされていたことが明らかになった。

そこで1952年から53年までの教会暦年の間の救援事業委員会は、初めての「教会再建の都市」にドレスデンを定めた。フランクフルト・アン・デア・オーデル、マグデブルク、ロストック、デッサウ、ノイブランデンブルク、ノルトハウゼン - ハルベルシュタットが並び、1964年と65年に、ドレスデンが再興され、その時ワイマールなどが再建された。教会、牧師館、共同体の看護ステーション、幼稚園、宗教科の

教室の再建、部分的に破壊された福音主義病院の再建、老人と障害者の施設の再建は、それまでに軽減された。

「これらすべての福祉の努力は、全世界にある、また西ドイツ連邦共和国同胞教会の分かち合いのおかげであり、東ドイツ教会のディアコニーのスタッフにとっては励ましとなった。老人救護において、また母の福祉保護に、重大な自発的な役割が果たせるようになった。子どもの保護においても同様であった。スタッフたちはこれからなすべき奉仕のためにも事業をひろげている」。1957年の教会年鑑にそのように書かれている。[54]

この方法で東ドイツ内国伝道は前進し、結局「彼らの活動領域で自立した大規模なものとして国によって」認められるようになった。それについては、この場合、はっきりとかつ正式に「社会的共有の意味」が語られるようになった。この承認は、「重い障害をもった人たちのために、衰弱した人たちの中の最も衰弱した人たちのために、介護を必要としている人たち、老人たちのためにいつでもできる準備」を評価するものと思われた。彼らのディアコニーとシュヴェスターの教育は、そのディアコニー施設も同じように邪魔されずに活動できるようになった。福音主義病院はその成果に敬意を受けるようになった。金融緩和は、彼らが困窮したところでは、例えば1969年のように拒まれないようになった。「東ドイツにおける内国伝道と救援活動」の働きに関する本がシリーズで絶え間なく発行されている。[55]

救援事業と内国伝道中央委員会が合併する前の年、お互いは共同で行っていた。その時D. オールは、中央委員会副委員長として、そのことに決定的な関心を示した。そして1953年と54年以来、互いの協議と集会をする双方の首脳会談の共同開催を始めた。多くのことが困難であったしありつづけた。もしルートヴィヒ・ガイセルが「パウル・コルマル、ヴォルフガング・グリュデンペニヒ、およびヴィルヘルム・シュミットは共通するところがあり、またフォルクマル監督の庇護のもとで中央委員会の事務局のディレクターに執着し続けているotto・オールとフリードリヒ・ミュンヒマイアーがいつも交流し、多くのほかの人たちによって助けられる」のでなければ、「内国伝道と救

援事業との合併は成功しなかつたろう」。バイエルン内国伝道が同じように始まった。それは、「いつもわれわれの救援事業」を強調して語り、1957年来、最終段階で最後の困難を克服する助けとなったミュンヘンのディアコニー評議会議長オットー・リーデルは重要な鍵の役目を果たさなかつた。[56]

1955年の初めには、中央委員会と救援事業の2つの出版機関が、共同の雑誌「ディアコニー事業」に合併した。

共通の問題は十分に克服された。福音主義病院の場合、費用の保証問題は、医術の進歩によって常に高くなっていく要求に直面しても継続され、それは後年ずっとひきずった。短絡的な国の誤った決定の渦の中に巻き込まれないためには非常な注意が必要であった。彼らは正当な和解調停のために絶え間ない闘いをほんとうに再三再四机上に置いたのだ！ディアコニッセが朝早く働いていた所に、今は2人のきわめて優秀な専門家のメンバーが特別な領域のために加わっている。ディアコニッセたちの高齢化によって危険になっていく人手不足が感じられた。まもなくふさわしい働き手はしっかりした施設にはいなくなった。半ば取りかかっているかまたはまだ着手していない活動は、いつも大規模なものを引き受けていた。ここには夜間は働かないという、規則正しい労働時間を可能にする力がほとんどなかつた。

すでに1951年には批判的論調がその発展を嘆いていた。すなわち、内国伝道の職員たちのなかで、かろうじて3分の1の人たちが教会の伝統的なつながりをこえて、神から人格的に求められ、また呼ばれていることを知った。[57]

防止策がないわけではなかつた。ヴィルヘルム・レーエの100年祭に際して建設されたノイエンデッテルスアウ・ディアコニー施設は、当時の施設長、後に州監督になったD. ヘルマン・ディーツフェルビンガーが「ディアコニー年」を呼びかけた1954年に落成した。青年達は「社会奉仕を共同体ディアコニーのチャンスとして」提供しなければならなくなった。ディアコニー制度の中で障害者と老人の施設、病院の中で救護は「賢明になり、熟練し、また習熟したもの」になりえた。このことは、援助者がそこに帰っていく場合教会共同体にも影響を及ぼ

したに違いない。施設ディアコニーと共同体の間は橋渡しされた。

これらの施設は、その後幾多の変遷を経験した。援助者の動機は他のもの変わった。それらははじめに試みようとした社会的使命の中へ広がった。[58]

すでに以前から1949年フリーデバルト(ヴェスターバルト)に、ドイツ福音主義教会の中央社会学校が救援事業と、内国伝道中央委員会とドイツ福音主義教会の青年事業によって創設された福音主義社会学校が生まれた。その基本は福音を伝える社会倫理を形成した。[59]ここで教育された専門家たちは高い評価を受けた。彼らはその責任の重い職を自覚していた。彼らはディアコニー業務を拡大し、歓迎された。1945年の初めから、内国伝道の職員は、医者、看護婦、シュヴェスター、看護師、患者の体育教師、家庭教育の世話係、幼稚園教師のような異なった職業から得られたのではない。新しい特別な専門家たちも同じように、言語療法士、心理療法士、老人、家族看護師、異なった教育部門の教師集団、心理学者、精神教育指導者、ソーシャルワーカーたちには、もう不自由することはなくなった。神学者たちは常に、責任ある地位にいた。手工業も同じように、例えば、機械工あるいは家具職人、家政婦、料理人、秘書や経営者、金融専門家、そして援助者集団の多数が不可欠のものとなった。

1956年、新しい奉仕業務が、当時予想されなかったブームを世界的に広めた電話牧会の中ではじまった。それは社会福祉国家また福祉国家の中では、老人だけではなく孤立し孤独になった人の精神的困窮を予告していた。[60]

真の戦後世代は次第に後退していった。多くの同時代の人たちは、合理的な繁栄の確保のために、時代の精神に従った。彼らは職業を選択するようになった。人は自分の意志を強く持ってしたいことに強い関心をもっている。そしてみんなが共同でしなければならないという考えは輝きを失った。「貧しくなるはもういない、飢える人はもういない。敗北する人はもういない」。人は皆くじけないで働いた。住民の80%が職について毎日働けることが生活の柱となった。日々の生活に急速な変化がはじまった。1952年12月25日、テレビが毎日放送されるようになった。1953年6月2日に100万人がイギリスのエリザベス2世の戴冠式をテレビで見た。今²⁶西ドイツ国民のおよそ25%の人が年次休暇を外国で過ごしている。しかし、1953年、街では10,936人の交通事故死亡者が数えられ、そして、1939年にポーランド出兵が続い